

松田修先生から学んだこと

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

100

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

1994-03-15

松田先生から

学んだこと

横道 闕（文学部講師）

狭い研究室には専門書を押し返けて様々な雑誌が並んでいて、その中には初めて先生の名前を知った映画雑誌もあった。小人数のゼミが始まってからも話が脱線すると必ず私にコメントを求められたが、その悪戯めいた眼差に答えるのが部屋に向かう楽しみだった。在籍中には残念ながら先生を刺激するほどの作品をお見せすることができなかったが、少しでも早く先生を驚かすような作品を作ることが一番の御恩返しだと思っている。

齋藤 勝（一九八九年卒）

机の奥から卒業論文を探し出し、久しぶりに眼を通してみた。時間追われて書いたとはいえず、情けない出来である。これでよく松田先生が卒業を認めてくださったと感謝するやら、感心するやら。面接のときも拙い意見を最後まで聴いていただけ。大学の先生方には研究者のイメージを持っていたわたしが、教育者としても優れた方であれば勤まらないことをその時知った。先生、ありがと

うございました。

伊藤 寿浩（一九九二年卒）

私の松田先生に対する第一印象は、「風変わりな」といったところ。側近の中込氏に、先生は本が大変好きで古典もマンガのごとく読む人と聞いて、普段新聞はどこなところを読むのか質問すると「殺人事件や誘拐の記事」と言われ、その意外性に思わず笑味をおぼえました。と同時に、当時の自分を含め、読書の機会をつくらぬ学生が多いことを痛感しました。松田先生から学んだことは、ズバリ「本を沢山読む」ことです。

中村恵美子（一九九〇年修士修了）

先生からは、非常に自然なたちで研究のやり方を教えていただきました。それにあわせて、研究することの楽しさ、その楽しさの裏にはりついている困難さ、その困難さから生み出される大きなよろこびも、知ったように思います。

齋藤 隆司（修士課程二年生）

浅井了意、伽婢子、狗張子、松林伯円、安政三組盃、上田秋成、井原西鶴……。

天と地の狭間で、もがき苦しみ遊ぶこと。

森 聡子（一九九一年卒）

松田先生から学んだことというと、なんなだか堅苦しくなりますが、私が2年間のゼミ活動を通して今でも忘れられないのは、夏の

ゼミ合宿で先生が5時間近くも話し続けていたことです。知識的にも体力的にもこんなエネルギーが、一体どこに潜んでいるのだろうか、正直驚かされました。

そんな松田先生が退官されるのは、大変残念に思いますが、私の記憶の中の先生はいつまでも熱心に語り続けていることでしょう。

榎本 紀子（一九九〇年卒）

私達の学年がゼミで松田先生に師事したのは、四年生の一年間だけである。一年間の国内遊学を終えて大学に戻ってこられた先生のゼミは、洒落を交えたご自身の自己紹介で始まった。だが発表者にとっては洒落どころではなく、「時間をかけた割に内容がないね」といったお言葉もよく聞かれた。私もそんな勉強不足の学生の一人であったためか、先日私用で約四年ぶりにお会いした先生は、当時よりお元気そうに、やさしそうにみえた。

滝沢 啓（日文科三年）

20歳の時、先生は酒を断たれたそうだと。

あなたは、よく飲む方なんですか？

問い返されて人並に酒をやる私は、ぼちぼち、です。ひるみつつ答えた。

その時、20歳の青年に、何が酒を断たせたのだろうかと不図思い、咄嗟にそのことの重みを感じた。

その重みは私に厳粛な感じを与えた。以来先生の文章に触れる度にそれと似た感じを受ける。私はそこに先生の匂いを覚える。

町野 弘幸（一九九二年卒）

松田先生の授業を3年間受講し、著作を通してのファンだったにも拘らず、生来の口下手のせい、最初の2年間、全く先生に話しかけることのできない有様でした。

唯一、先生に近づく方法といえば、先生の著作を片っぱしから読むことで、既成の学問領域にとらわれない先生のユニークな発言の数々は、まともに勉強などしない私にも多くの刺激と宇宙を与えてくれました。私の片思いもまんざら無駄ではなかったのです。

山崎 正憲（一九九一年卒）

松田先生の授業の想い出といえば、私はやはり、あの古典的なギャグを想い出す。

講義中に、所々でギャグを言うが、私は気付かない事や、なかなか理解できない時が多く、よく考えさせられた。時には誰も気付かない事もあったが、先生は懲りずによく言っていた。

松田先生、お疲れ様でした。お体に気を付けて、これからも元気でいて下さい。

坂本 辰次（一九九二年修士修了）

松田修という人物は、一種の麻薬であった。私は、高校の頃からそれを盗み味わってきたのだが、玉稿は元より、後年は小旅行や病院行脚などでもトリップする幸運に恵まれた。魔力の一つは特異な美的感覚にあり、それが入ゼミの吸引力ともなっていたが、入ってみると罵倒や叱咤の多い悪場所の日々であった。毎度の事だが、先生の要求するものは、どんな小さな事柄にもアプローチを怠らない探究心であった。